

私達人間は、生まれた瞬間から、老いること、病むこと、死ぬことが約束されています。生老病死の苦しみは、すべての人間が避けて通ることのできない事実です。しかし私達は、そのことを忘れがちです。生きていく上で、そのことは見ないように、かかわらないようにしているのかもしれませんが。

私自身の体験ですが、昨年秋、肝臓に異変がおこりました。体力気力も無くなり、笑うこともできなくなっていました。この経験を通して、私は死ということが身近に思えるようになりました。明日も生きているという根拠のない自信を少し抑えて、明日死ぬかもしれないという言葉を念頭に置いて生活しようと努めています。

しかし私の死の自覚は、まだ楽観的で、いつの間にか、明日も生きているという思いが増幅していきます。実際、今年に入ってから、身近な人の死を経験しましたが、それでもなお、自分は明日も生きていると、どこかで思っている自分の愚かさに気づかされます。身近な方の死は、とても悲しく、つらいものですが、その方の死を通して、自らの生き方を見直すということが、残された者のあり方ではないかとも思っています。見直さなければいけない生き方とは何でしょうか。生老病死を忘れて、欲望のままに日暮らしをしていることだと思います。先日、こんな言葉を教えていただきました。「死ぬまで生きるか、それとも生死を超えて生きるか」というものでした。「生死を超えて生きる」とは、今、この一瞬に全力を尽くすということになるのでしょうか。その一瞬には、後悔も言い訳も無く、大満足の中で生きることだと思います。私は犬や猫と一緒に暮らしておりますが、彼らを身近で見ておきますと、そんな生き方をしているように思います。昨日のことを引きずることなく、明日のことを心配せず、今を生きております。彼らより少しだけ賢いと思っている私には、彼らがうらやましく思えます。私自身が生命を生命のままに生きることができないのは、人としての思い上がりではないかと思っています。一生懸命生きてきたつもりだけれども、果たしてこれで良かったのか、私自身には私が見えない。迷いながら今日まで生かされ、そして最後の瞬間まで、迷いの中で生きることでしょうが、迷いながらも生かされているということの有り難さは、理解しているつもりです。愚かな私を生かすために、多くの生命が犠牲になっているということだけでも、感謝の思いでいっぱいです。何も気づかず、何もできない私であっても、最後まで、この感謝の思いだけは忘れずに、一切の思いを残さず、ここを去らなければならないと思っています。